

従来、中世の葬送研究は、石塔に代表される身分層を対象とし、しかも京都や鎌倉といった都市が中心であった。それに対しても、本簡群は地方村落におけるものであることは確実であり、さらには身分層や、文献史料に見出しがたい往生以外の葬送形態を示す可能性も含む。『弘法大師行状絵巻』第二二八紙に近い実情と推測され、その重要性が見出される。

なお、木簡の釈読とその解釈にあたっては、新潟大学の矢田俊文氏他の新潟県内の中世史研究者の方々、(財)元興寺文化財研究所の狭川真一氏のご教示を得た。

關伊文蘭

新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団「一般国道8号白根バイパス関係発掘調査報告書 浦廻遺跡」(2003年)

なお木簡の釋読とその解説にあたっては、新潟大学の矢田修文氏他の新潟県内の中世史研究者の方々、(財)元興寺文化財研究所の狭川真一氏のご教示を得た。

(田中一穂)

所在地	新潟県北蒲原郡中条町赤川
調査期間	二〇〇二年(平14)六月
発掘機関	中条町教育委員会
調査担当者	水澤幸一
遺跡の種類	官衙跡・自然流路
遺跡の年代	奈良時代末期～平安時代初
遺跡及び木簡出土遺構の概要	

7	6	5	4
遺跡の種類	官衙跡・自然流路	調査担当者	水澤幸一
遺跡の年代	奈良時代末期～平安時代初期		
遺跡及び木簡出土遺構の概要			

調査地は現在平野に立地するが、河川蛇行部の葦原の微高地に築かれた遺跡である。今回の調査は県営圃場整備事業に伴う水路部分の調査で、幅三m長さ七七m、面積は二三一m²である。

調査の結果、川跡、柱穴・溝などを検出したが、建物の規模などは不明である。木簡は全て川跡から出土した。上流にあたる東側の川から「九九」木簡(1)が出土したほかは、いずれも下

流にあたる西側の川跡から出土した。遺物の多くはこれらの川跡からの出土で、東側の川からは、大量の須恵器や木製盤・大型曲物などとともにしがらみ遺構を検出した。西側の川からの出土遺物は少ないが、木簡のほかに壺鑑などの木製品が出土している。

8 木簡の糸文・内容

(1) 「六八冊八 五八冊 四八冊三 三八

・「□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

(253)×26×4 019

(2) 「□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ 升 荘 □ □ 猪油」。

・□ □ □ □ □ □ □ □ □ □
升 荘 □ □ 猪油
〔四月廿九〕

○

(171)×32×4 019

(3) 「□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

・「右人 □ □ □ □ □ □ □ □ □ □
〔仍カ〕

(91)×30×2 019

(4) 「○ □ □ □ □ □ □ □ □ □

・「○ □ □ □ □ □ □ □ □ □

92×31×6 011

(5) 「□ □ □ □ □ □ □ □ □ □
〔之カ〕」

(178)×17×6 019

(6) 「□ □

・□ □

(186)×(18)×5 081

(1)は下端を欠いており、両面に八の段の九九が書かれている。四八冊」という間違いがみられる。九九木簡としては新潟県内初例である。(2)は二つに割れており、上端を欠く。下端近くに孔を穿つ。物品及び数量が書かれ、裏面には月日が認められる。物品進上札である可能性がある。(3)は縦に二つに割れており、下端を欠く。(4)は文字が判読できないが、両面に墨痕が認められ、上端に孔が穿たれている。(5)は上を、(6)は上下左右を欠く。

なお、糸文は、長岡技術科学大学の相沢央氏のご教示による。

(水澤幸一)

